

3 日本文化の再評価

このような日本人の発想・思考は、いわゆる一神教的な独善主義や自分勝手な利己主義と正反對の立場にある。それゆえか、日本の伝統思想は、かつて西洋一辺倒の思考に立つ人びとから、ほとんど評価されなかった。しかし、最近では、欧米のゆきづまを打開する鍵が日本の伝統思想にあるかもしれないという関心から、しだいに再評価する論者も多くなり、こちらが戸惑うような礼讃すら見受けられる。

たとえば、学校でも会社でも、みんな自分の家族のように「うちの学校」「うちの会社」といつて一体となり、しかも相手の年齢や地位によつてデリケートに敬語を使い分けながらスムーズに仕事をすすめる。そこで、日本企業の強い秘密として、家族的な人間関係を重んずる年功序列や終身雇用などの日本式経営を、試みに採り入れるところも出てきたようである。

また、近代欧米では、自然を科学の力で人間の都合のいいようにつくり変えることにより文明社会を築いてきた。日本においても、その欧米をまねて、明治以降、とりわけ戦後の経済成長下で、ずいぶん乱暴な自然破壊や環境汚染を急速に推し進めてし

まった。しかし、その結果、生活が便利になった反面、資源の枯渇を憂い、直接・間接の公害に悩まねばならなくなっている。

そこで最近では、自然との調和をはかることに力点が置かれ、それにともなつて物を粗末にしないことも見直されつつある。これは結局、自然を畏敬するとともに、物のいのちを大切にする古来の日本の考え方が、現代人の心にもまだ生き残つていたからではないかと思われる。

さらに、古来の精神基盤の上に外來の文化文明をも積極的に受け入れた日本においては、一をとつて他を捨てての式ではなく、それぞれの長所を活かしながらできるだけ共存させてきた。前述の神儒仏の融合や漢字と仮名との関係などは、その典型である。しかし、戦後の混乱期には、先の方針に合わせて当方の基準を捨て去つてしまふことが、あたかも合理化や国際化のごとく錯覚されがちであつた。

そのために、たとえば日本で古代から使われてきた尺貫法、および維新以降使われていたヤード・ポンド法は、昭和二十六年に成立した「計量法」によつて、八年後の三十四年（一九五九）限りで使用禁止となり、メートル法のみで統制されてしまつたのである。

また、日本で千三百年近くおこなわれてきた年号（元号）の制度も、戦後、法的根

拠が曖昧になり、放つておけば西暦（キリスト紀元）に一体化されかねない状態にあつた。さいわいこちらは、世論の盛り上がりもあつて、昭和五十四年に「元号法」が成立し、存続が可能になつたのである。

この元号法制化論議にさいして、上智大学の渡部昇一教授は「ダブル・スタンダード」の効用を指摘された。たしかに年号と西暦の長所をおのおの活かして使い分ければ、どちらか一方のみに限るよりも便利なはずである。このような複数の基準の適度な併存こそ、日本文化の豊かさの一例といつてよいであろう。

もちろん、日本文化にも短所・欠点は少なくないから、それを自覚し補正する努力を怠つてはならない。しかし、それ以前に、その長所・美点を正確に認識して、それを一方でみずから継承し発展させながら、他方で外国の人びとにもつぎの世代にも、それを説明し理解を求めめる努力こそ、いま必要とされており、われわれの重要なつとめにほかならないと思われる。